

# 室町公家衆と浄土宗

——藤原勧修寺流を中心として——

西 田 圓 我

わが国に仏教が伝来した当初から、海外文化受容に積極的な進歩的な氏族にあっては、競って当時蕃神と考えられていた仏教を受容し、各氏独自の氏寺を建立して氏族の繁栄を祈った事情については改めて多言を要さない程、よく知られた事柄である。しかしながら、この氏寺信仰が当初の姿そのままに後世までつづいたわけではないのであって、氏寺信仰の形態にも変遷の歴史があったのである。

大化改新のとき、改新派グループの一員として重要な役割を演じ、その功によって孝徳天皇の即位と同時に内臣の重職を与えられた中臣鎌足を始祖とする藤原氏について氏寺信仰の変遷を概観することにした。

藤原氏にあっては、鎌足の子不比等のとき鎌足の建てた山階寺を奈良へ移して興福寺と改称して一族の氏寺としたのであるが、その後摂関期に政権をほぼ独占した藤原氏は、平安中期以降その内部における政権争いのために、藤原氏全体としての氏族の結合から各門流ごとの結合へと分化をきたし、藤原氏全体の氏寺としての興福寺以外にそれぞれの門流ごとの氏寺を存立することとなるのである。御堂関白道長の子孫、御堂一流の氏寺は頼長の『台記』久安六

年（一一五〇）正月一日の条に「興福寺・極樂寺・法性寺・法興寺・法成寺・平等院已上氏寺」と見えている如くに繁栄を極めることになるのであるが、このことは一面においては他の門派の反感を惹起して、各門流ごとの氏寺へと分化を促す結果となったのである。御堂関白一流の氏寺に対立して高藤の建立にかかる勸修寺がその子孫所謂勸修寺一門の氏寺と呼ばれ、この寺において修せられた法華八講が一門によって氏御八講と呼ばれていること等がこれにあたる。<sup>①</sup>藤原北家の庶流高藤流の人々を「勸修寺一流」（永昌記）とか、「勸修寺輩」（玉葉）などと呼称することは平安末期までに一般化し、高藤流の人々はその一門を「氏人」（大府記・永昌記）と意識していたが、このことは言うまでもなく一門の氏寺勸修寺に由来するのである。勸修寺は贈皇太后藤原胤子が所生の醍醐天皇を「為令誓護」に山城国山科の宮道弥益の宅趾に建立したものと<sup>②</sup>いわれ、延喜五年には定額寺に列してその後永く皇室を始めとして宮廷貴頭の尊崇を集めたのである。「勸修寺旧記」（続群書類従巻七八〇所収）等によると、高藤及びその一門も創建当初より密接な関係があり、殊に高藤の息男右大臣定方が延喜年中に亡母列子のために勸修寺内に西堂を建立するに及んで、高藤流一門の氏寺としての地位を決定的なものとしたのである。定方の息男朝忠・朝成は父の薨後その志をついで西堂を修備し、毎年定方の忌日には同堂において法華八講を修し、氏人がこれに参集することを義務づけた。そして高藤流の廷臣中おおむね官位第一の者を選んで「氏長者」とし、恒例の八講会を修したのであるが、これを前述のごとく氏御八講と称したのである。「氏長者」は氏御八講のみならず勸修寺のこと全般の沙汰を行なったが、それは必然的に「御寺事」に止まらず、「家門事」にも力を尽すべき地位と見做されたのである。<sup>③</sup>『大府記（為房卿記）』、『永昌記（為隆卿記）』以下高藤の子孫の日記に勸修寺八講の際の行香の氏人を記する場合に、その氏人と言うのは藤原氏の氏人と言う意味ではなくて、高藤の子孫所謂勸修寺一門の人々のみを指す言葉であり、また『大鏡』に高藤を指して「勸修寺の氏のはじめなり」と言うがごとくに藤原氏内部にあって、この一門だけで独立の一つの氏族を形成しているかの如き感があり、事実、藤原氏の氏長者とは別に、前述したごとく勸修寺一門の氏長者さへ持って、仏事のみならず家

門一般の沙汰をも行なったのである。かくして勸修寺一流は「氏長者」のもとにその門閥的結合を形成していくのであるが、白河朝の永保元年には正五位下の位に任じて長者となつたのちの参議大藏卿為房を始め、五位藏人十人を数えるほどの勢いであつた。

勸修寺流は、さきにも述べたように、藤原北家の庶流として中流貴族の地位にあまningじてはいたが、摂関期に占める勸修寺氏人の勢力は侮り難いものがあり、更に院政期に入つて飛躍的な発展をとげ、さらにそれ以後の一門の繁栄は勸修寺流の系図をみただけでも明瞭に看取される。こうした中で氏寺勸修寺は高藤流廷臣の結合の精神的紐帯となり、各々が同門意識のもとに相扶けて家門の興隆を計つたのである。この点に關しては、中山忠親の日記『山槐記』治承三年（一一七九）正月十日条に、「此一族人々如父子大小巨細各相憑」と見えていて、この間の事情を明瞭に物語っているのである。

勸修寺流中興の祖参議大藏卿為房は長子為隆を措いて、次子顯隆を家嫡に立てたと伝えられ、『尊卑分脈』の葉室一流の顯隆の条に、「葉室流稱嫡家一事」とあつて、この間の事情を説明した記載がなされている。この記載は、父親の希望によつて官途の優先が弟の顯隆にあり、立嫡が官途への推挙を伴つていたことを伺わせている。葉室中納言顯隆ののちは、子息顯頼、顯長ともに権中納言、孫光頼、曾孫宗頼はいずれも権大納言に昇進して、葉室一流の基礎をかためた。これに對して参議大藏卿為隆の一流は、息男光房は権右中弁で終り公卿に列したことはなく、孫の経房に至つて始めて権大納言に昇つた。これが吉田の家系である。のちにこの家系は諸家に分立して、勸修寺・甘露寺・清閑寺・小川坊城・中御門・万里小路・海住山・町口などを称し、公卿になりうる家筋として中世初頭には固定した摂関家、清華、大臣家、羽林家、名家の内、主として名家を構成する主要な家筋として、室町時代には葉室家よりもむしろこの一流の方が栄えるに至るのである。

のちの五摂家の源流をなす御堂一流と中流貴族としての地位にあまningじた勸修寺一流とを對比しながら論を進めて

きたわけであるが、室町時代に至ると、勧修寺一門の一支族たる甘露寺家の第四代当主甘露寺親長の『親長卿記』文明九年（一四七七）閏正月十九日の条には、一門を「親類の人々」という風に考える意識があり、ここでは氏という共同団結体よりも、むしろ自分を中心として己と他との個人的関係を重視する考えがみられて、中世末期には勧修寺一門の例でみられた血縁の意識、一門または家の觀念がまた更に変質してきている事実が考えられるのである。信仰形態においても従来の血族信仰が家毎に分岐する傾向がみられて、氏長者を通じての氏と氏寺との結合から各家単位で個人が直接に旦那寺に連るという近世的な信仰形態へと近づきつつあるのであり、御堂一流や勧修寺流でみた氏族と氏寺関係にかわるより自由な師檀関係が生じてくることになったのである。のちに詳しく述べるように、中世末期に至ると、勧修寺一門を例にとってみても、万里小路家と清浄華院、中御門家と真如堂、甘露寺家と盧山寺という風到家単位で浄土宗系寺院と地縁的な師檀関係を結ぶことになるのであるが、この他若干の藤原氏の庶流たる中流貴族及び、中世初頭に固定した官務家、局務家などの実務官僚家なども合せて、中世末期の中、下流貴族の浄土教信仰の実態について若干の考察を試みたいと思う。

## 二

さて、氏寺信仰の変遷を考えていく上で、今一つ重要なことは、浄土教信仰の普及に伴ない、寺院自体が菩提寺的乃至は往生院的性格が濃厚になってきていることである。つまりわが国における本来の仏教寺院の有り方とは異質な寺院が撰関期頃から成立したことに注目しなければならない。元来氏寺とは氏族の繁栄を祈る現世利益的な信仰を多く含むのであるが、浄土教信仰が貴族階層に行き亘るとき、撰関家の別荘の持仏堂から寺へと発展した法成寺や平等院に見える如く個人の持仏堂の段階ではまだよいのであるが、のちにそれが寺となると、一身一門の、引いては衆生の浄土往生を求めんとする寺がまた同時に氏寺と見なされている。しかし来世を重んずる浄土信仰の道場が同時に

氏寺でもあるという事には既に矛盾が含まれている。浄土教的な信仰が現世利益的な信仰にうち勝つてくるとき、それは当然万人の差別を軽視または無視する事を要求してくるべきものであって、自分一人の念仏の為に他人を退けるが如き態度は否定されるのは勿論、更に信仰を氏族一門に限る事もまた否定されるべきであって、この矛盾がやがて氏寺意識の変化・氏寺信仰の衰退をきたす原因となるのである。

翻つて、室町時代において公家階層が浄土教へと著しく傾斜した原因を考えると、彼等が現世に対する危機意識を非常に強めたことをあげねばならない。特に応仁・文明の大乱を経て中世末期に至ると、当代第一等の学者である三条西実隆の言葉を借りるならば、「末世澆季の世」、「法滅の時」、「無道の世」、「濁乱の世」、「不可説の乱世」、「神威皇鑑無きが如き末代」（典拠はいずれも『実隆公記』）とあって、公家階層にとって、危機感が大変高まった時代であつたことが理解できるのである。正しく戦国大名の歴史上に登場する前史の時代にあたり、年貢米は横領されて京までとどかない。そこで仕方なく身につけている文化的な教養を切り売りしながら、わずかな束脩を得て糊口をしのぐのが常であつた。三条西家は公卿階層の第三等大臣家に属する高級貴族の家系であるにもかかわらずこの有様であつて、わずかな束脩を得たぐらいでは、日々の生活の糧を得るにも苦勞が多く、土倉（質屋）の世話になることもしばしばというような状況であつた。公卿階層といえども当時はおしなべて斜陽貴族であり、現実の苦しい生活につかはれて、現実逃避の態度が濃厚にみられて、酒宴、和歌、連歌、その他郢曲と総称される歌曲を奏して刹那なりとも浮世の憂悶を忘れ、実隆の場合には、特に、有職故実の研究に情熱をかたむけて現実から逃避し、この世に絶望して熱烈に浄土を欣求するという生活態度であつたのである。

### 三

さきにも少しふれたように、家単位で個人が直接に且那寺と師檀関係を結ぶという近世的な信仰形態についてであ

るが、従来の研究では徳川幕府の政策上の所産であるかのごとくに主張されているが、既により早く中世末期において師檀関係固定化のきざしが見えている。その事例としては、公家階層にあっては、旦那寺の僧が齋参りをする風習が固定化したことがあげられる。

浄土宗が室町時代において宮廷へ接近するのは、後花園天皇の葬送のときからである。甘露寺親長の『親長卿記』文明二年（一四七〇）十二月廿六・廿七日の兩条によると、代々天皇家の御廟所であった泉涌寺の住僧は応仁、文明の大乱をさけて地方へ疎開中であり、勅願寺である元応寺の住持も坂本辺へ移住していて急の役にたたない。そこで浄土宗百万遍知恩寺の住僧が後花園天皇の葬送に出仕したのである。こうしてそれ以後、浄土宗と禁裡との関係が密になっていくのであるが、公家衆にあってはすにより早くから浄土宗との師檀関係を認めることができるのである。

中原康富の『康富記』によると、応永年間からすでに浄土宗円福寺との関係が見えていて亡父その他の先祖の月忌毎に円福寺の僧を招請して念仏を唱えている。中原氏は清原氏と並んで明經道の博士家として著名で、代々権大外記日守守隼人正の地位を相続して、中世以降は代々局務家を世襲する実務官僚の家筋であるが、康富自身は鷹司右大臣房中の家礼としても活躍したのである。旦那寺である円福寺はもと京都五条坊門猪熊の地に所在し、浄土宗西山義の諸師に相続された寺院である。中原氏はこの寺と地縁的な関係によって師檀関係を結んだと思われるのであるが、さらにその関係をより強固なものにしたのは子息五郎丸を官務小槻長興の猶子として円福寺へ入室せしめたことによっている。康富は文安元年（一四四四）七月十四日の条で、「詣円福寺墳墓」（中略）愚息小見出逢、円福寺之附属之弟子分也」と彼の日記に書きとどめている。師檀関係を具体的に示す史料としては、文安元年（一四四四）八月廿七日の条で、

是日五条坊門猪熊円福寺浄土宗

故長老暢意上人第七回忌日也（中略）蠟燭代三十疋送進也、代々為二師檀一云々

と見えるのが代表的なものである。

万里小路時房の『建内記』の語る処によれば、万里小路家と清浄華院との関係は清浄華院第八世教法上人のときか

ら始まることが知られるのであるが、時房の祖父（仲房）及び祖母、時房の父（嗣房）の臨終のときの善知識は教法上人であり、第九世僧然定玄は仲房の子息で時房の叔父にあたる。ここでも、万里小路仲房は自分の子息を教法上人の弟子として入室せしめて師檀關係をより強固なものにしていったのである。『建内記』永享元年（一二二九）六月九日の条によつてこのことを具体的に知ることができるのである。

祖父祖母、亡父兩代臨終善知識事、淨華院教法上人也、三衣一鉢 同前亡父出家師同教法上人也、剃髮役彼当住等

上人也、亡母同前、又亡母臨終善知識等濕上人也。

定玄上人者祖父御息、先公御弟也、亡母并予円頓戒師匠也、予自少年養育恩山是高、当住上人者定門者、敬法上人之弟子、定玄之同寮也、戒法并住持附屬者定玄上人之所許授也、由緒之趣如此。

先公者初妙喜円月中巖和尚之弟子也、終歸淨土宗、於淨花院遂素懷、以教法上人為師匠也。

と見える史料によつて清淨華院第八世教法上人、第九世僧然定玄上人、第十世等濕上人と万里小路一族との具体的な關係を知ることができるのである。

忌日に關しては、父万里小路嗣房の忌日は、毎月六日、亡母の忌日は毎月四日、おのおの毎月欠かさず仏事を営んでいる。曾祖父季房の正忌日は五月廿日、祖父万里小路仲房の正忌日は六月二日、外祖母正忌日は六月十九日、おのおの欠かさず仏事を営んでいる。また祖父仲房に關しては、亡父母と同様に毎月ごとの月忌をも営んでいる。その他高祖父宣房の月忌、外祖母の月忌、曾祖父の月忌の記述も時として記載されている。また養母甘露寺氏の月忌をも営んでいる。月忌毎の仏事を営むようになったのはこの時代の大きな特色である。しかもこの齋参りに招請されるのは万里小路家の場合には淨華院の僧か又は塔頭松林庵か無量寿院の住僧であつた。

『建内記』正長元年（一二二八）二月四日の条には、

先妣御忌日也、招請淨花院長老（等濕）、（中略）先点心、次勤行、阿弥陀經、往生礼讃、念仏等也、次御靈供

先公御霊、諷經了、次斎食了分散。布施物迫可<sub>レ</sub>沙汰送<sub>レ</sub>之。

と見えているが、これと類似の史料は枚挙にいとまのないぐらゐに検索することができるのである。

次に特殊な事例であるが、当時の信仰形態を知る上で興味深い記事を示すと、

『建内記』永享十一年（一四三九）六月一日の条に、

曾祖母誠覚、御霊供、毎月之儀也、毎月雖<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>精進、看經以後随<sub>レ</sub>世俗祝<sub>レ</sub>朔日<sub>二</sub>之儀<sub>一</sub>用<sub>レ</sub>魚味<sub>二</sub>也、但今月為<sub>二</sub>明

日尊祖<sub>二</sub>限<sub>二</sub>日数<sub>二</sub>自<sub>二</sub>先日<sub>二</sub>精進也。

と見えている。六月一日は曾祖母誠覚禪尼の忌日であり、明六月二日は祖父仲房の正忌日である。先日より日数を限って精進潔斎して正忌日の仏事にそなえていたのであったが、六月一日、この日ばかりは曾祖母の忌日であるにもかかわらず、世俗で朔日を祝うという年中行事の慣習に従って魚味を用いたのである。当時の年中行事優先という時代の風潮をよくあらわして興味深い内容である。

中御門中納言宣胤の『宣胤卿記』も真如堂との師檀関係を知る上での格好の史料であるが、ここでは従来の持仏堂にかわる役割を寺の本堂がはたしていることに注目しなければならない。文龜二年（一五〇二）四月十二日は亡き妻の一周忌にあたるので、宣胤は四月五日晚より「参<sub>レ</sub>籠此御堂」して「自<sub>二</sub>明日<sub>一</sub>七ケ日為<sub>二</sub>称名念仏<sub>一</sub>也」と日記に書きとどめている。即ち持仏堂に籠るかわりに寺の御堂に参籠して七ケ日精進潔斎してお籠りをして念仏にあけくれやがて十二日の正當の日を迎えるのである。

四月十二日の条では、

今日北堂一回正忌也、於<sub>二</sub>真如堂<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>僧十二口<sub>一</sub>修<sub>二</sub>百万返念仏<sub>一</sub>（中略）余又一身唱<sub>二</sub>百万反<sub>一</sub>、至<sub>二</sub>今日<sub>一</sub>終功、又毎日請僧別少布施、雖<sub>レ</sub>存<sub>二</sub>懇志<sub>一</sub>、所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>力也<sub>一</sub>、宰相来、於<sub>二</sub>堂有<sub>二</sub>飯<sub>一</sub>、晚参<sub>二</sub>墳墓<sub>一</sub>、催<sub>二</sub>涙<sub>一</sub>。

と具体的に記載している。「雖<sub>レ</sub>存<sub>二</sub>懇志<sub>一</sub>、所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>及<sub>二</sub>力也<sub>一</sub>」とは実に興味深い。当時おしなべて斜陽化した貧乏公卿



の一面をさらけだしている。さて、宣胤が真如堂へ参籠中にちょっとしたハプニングが起るのである。四月六日の条で昨夜洛外神楽岡の宣胤の屋敷に盗人が数十人乱入して衣服雑物等の盗難にあったことを伝え聞いている。今回が初度ではなく、前の洛中の屋敷が一度火災に会い盗賊の乱入は洛中で二回今回の神楽岡で三回目であるが、せめてものなぐさめは真如堂でお籠りをしていたので危害を加えられなかったと仏の加護を喜んでいる。宣胤達が危機意識を実感として持つに至るに充分な出来事であった。

『宣胤卿記』においても『建内記』に見えるのと同じように月忌命日に關する多くの史料を見出すことができるのである。亡き父母に關する月忌命日については、文明十三（一四八二）年正月三日の条に、

故一位殿月忌、精進備<sub>レ</sub>盡供<sub>二</sub>如常<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>真如堂<sub>一</sub>供<sub>二</sub>養僧<sub>一</sub>。楽人景俊来、慈惠大師別課<sub>レ</sub>例。

と見え、文龜元年（一五〇二）十二月十二日の条では、

母堂月忌、請僧等<sub>レ</sub>如例、参<sub>二</sub>詣真如堂<sub>一</sub>称名念仏移<sub>二</sub>□<sub>一</sub>、次参<sub>二</sub>墓所<sub>一</sub>、以<sub>レ</sub>次代々列祖悉廻向（下略）

と見えていて、亡父母の月忌命日に旦那寺の僧が斎参りし、施主が墓参りする風習が確立していた様子を知るのである。文明十三年（一四八二）七月十日の条では、

詣<sub>二</sub>吉田墳墓<sub>一</sub>、真如堂僧一人相伴。（下略）

と記載されているから、今日見られる僧侶による墓回向の形式も既にこの時代にはととのっていたのである。

さて、文明十三年（一四八二）七月廿九日の条は宣胤の伯母に關する記載が見えるが、「今日伯母長<sub>八</sub>菅<sub>十</sub>禅尼<sub>八</sub>、長

病及老衰之間、奉<sub>レ</sub>送<sub>二</sub>東山真如堂<sub>一</sub>、今日事切<sub>々</sub>云<sub>々</sub>」と見えて、ここでも従来<sub>々</sub>の持仏堂にかわって臨終行儀が寺の御堂で

行なわれていることが知られる。室町時代は公家衆の触穢に対する忌避がきわめて強く、前述の三条西実隆ですら永年召し使った下女が死にひんしたとき、触穢をのがれるために重病の下女を近所の観音堂辺の小庵へ捨てている。また、三十余年も召仕えた正直者の下女梅枝なる者を、死期がまじかにせまったというので夜ふけにそっと今出川辺に

捨てている。<sup>9)</sup> いわゆる姥捨てである。死体は不浄なもの、しかし追善回向によって祖霊が仏となって子孫に繁栄をもたらすという信仰が普遍化しつつあるのを知るのである。このような風潮をうけて、ここで見られる寺院の形態は正に菩提寺乃至は往生院そのものであり、墓寺の様相が濃厚に見られるのである。生前に修する罪障消滅を願う逆修乃至は預修信仰が減少して追善供養の形態が著しく増大する過渡期が正しく中世末期であったというように思われる。藤原北家四成家流、四条中納言家成の六男権中納言実教を祖とする山科家は中流貴族である羽林家の一つであって、代々大納言を極官として有職故実を家業として筈・装束のことに特に秀でた家筋である。この山科家一族に関する史料は、『教言卿記』、『教興卿記』、『言国卿記』、『言経卿記』、『言緒卿記等』と内蔵頭に任ぜられた山科教言以後、即ち応永十二年からはほぼ時代を追って現存している。その他に、これらを補うものとして山科家の家礼、大沢久守、重胤等によって書き継がれた『山科家礼記』が現存している。これらの日記を時代を追って追跡調査すると興味深い結果をうる事ができる。この中から清浄華院と師檀関係を結んだ時期を特に中心として考察を進めたい。結論からさきというと、始め禅刹と師檀関係を結んでいたと思われる山科羽林家にあっては徐々に天台浄土系へと傾斜を示し、やがて中世末期から近世初頭にかけて清浄華院と師檀関係を固めるのである。

『教言卿記』応永十二年（一四〇五）八月十五日の条に、「教言父教行忌日小仏事」と見えて、

宝生院来臨、宗財、宗範、宗門如形致三小仏事、点心ニ、無菜之時、施物、五百、小僧達二百文ツ、（下略）とある。応永十二年（一四〇五）十一月廿八日の「教言亡母の忌日仏事」の条では、

小作善、小僧正観、宗門同道也、老僧布施ハ如形三連、侍者兩人ニハ一連ツ、□小法師ニハ廿文与之歟。

と見える。翌年十一月廿八日の「教言母忌日仏事」の条では、正法眼蔵談義のことが記載されているので宝生院は禅刹と見て間違いない。教言卿の時代には、禅刹宝生院と師檀関係を結んでいたのであるが、いつの時代に天台浄土系へ傾斜したのであろうか。

『山科家礼記』をみても、応永から応仁年間にかけては禪刹との関係がつづいていようであるが、文明四年（一四七二）五月八日の条では、真如堂との関係があらわれてくる。『言国卿記』では、文明七年（一四七五）七月十三日の条に「念仏イツモノコトシ、夜ニ入真如堂へ予参也。」と記述されていて、明らかに天台浄土への傾斜が見られるのである。

さらに時代は降って、山科言繼の『言繼卿記』によると、天文十四年（一五四五）十月十五日の条では、「祖母忌日之間、本誓寺僧統全齋に來、相伴候了、」と見え、翌年正月十二日の亡父忌日の際にも本誓寺僧統全が齋参りに出向いている。しかし、天文十七年（一五四八）四月十二日の亡父忌日の条では、「亡父忌日之間、浄華院之内松林院乗清、齋に呼、相伴候了」との記載が見えて、同じ浄土宗では先年までは浄土宗西山義の本誓寺、この度は浄土宗鎮西義の清浄華院の塔頭の僧が齋参りに出向いているのである。これ以後も、天文十七年（一五四八）四月十五日の祖母安明院の忌日に際しては浄土宗西山義の仏陀寺の住僧を招請し、同年五月十二日の亡父の忌日に際しては先月と同じように清浄華院塔頭松林院の僧を齋に招いている。浄土宗には固定したが、寺院そのものの固定には至らず過渡的な時期が『言繼卿記』の時代であった。言繼自身の信仰形態を見ても、天文十七年（一五四八）五月十三日の条によると、

外祖母顯久大姉十七回之間、此間七日精進写經に觀經、阿弥陀經、看經に念仏十万反、光明真言、隨求陀羅尼等千反誦之、今朝仏陀寺之僧舜智、寿隣両人齋に來、觀經読候了、布施聊つゝ遣之、○晚天真如堂、誓願寺等へ参詣了。

と見えていて浄土宗西山義に近い信仰形態であったと思われるのである。

言繼の息男山科言経の代に至って、ようやく清浄華院との師檀関係が固定するのである。

『言経卿記』天正十一年（一五八三）八月十八日の条には、

亡母御忌日之間、浄花院榮玉<sup>（女）</sup>濟ニ相伴了、

と見え、同年九月二日の条では、

亡父（言繼）卿御忌日之間、松林院性心<sup>（意）</sup>濟ニ相伴了、

とあり、その他にも、御忌日の齋参りに関する史料は枚挙にいとまのないくらいに検索できて、いずれも清浄華院又は清浄華院の塔頭の僧が齋参りに出かけているのである。

先年清浄華院の宝物庫を実地踏査した際、明治初年の編纂にかかるものではあるが『清浄華院歴代靈名簿』なる一本が現存し、有力な檀越として万里小路家と山科家との歴代靈名が記載されていたことをみてもこのことは明らかである。万里小路家と山科家とがきわめて密接な親近関係にあった点に關しても『言繼卿記』の記載によると、浄土宗の宗祖法然上人の御忌会に際しては、

今日法然之御忌也、東山知恩院に法事有<sup>レ</sup>之、万里小路黃門誘引也。云々（天文十四年（一五四五）正月廿五日条）

と見えていて、言繼は万里小路中納言とつれだつて東山知恩院の法然上人御忌会法要に参詣したのであった。

最後に甘露寺権大納言家と盧山寺との師檀関係について考察したい。

『親長卿記』文明十一年（一四七九）六月廿三日の条に親長の亡父房長の正忌日に誓願寺の墓所へ参詣した記事が見えているが、文明十二年（一四八〇）七月十二日の条では、「参詣浄蓮花院墓所<sup>③</sup>」と見え、亡母及び外祖母墓に關する記事をのせているから、父方と母方と別々の墓所が存在し、父と母とは別々に葬られた古い型がまだ存在しているのであつた。古代から中世期にかけて婚姻を結んだ夫妻であつても、妻は自分の生家の姓を名のるのが通例であつたので、墳墓も里方に埋葬されるのが通例であつた。このことは、平安中、後期を通じて藤原摂関家に多くその事例を求めることができる。甘露寺家にあつては、近世的な師檀関係の固定化に至るのは、親長の息男元長の時代を待たねばならない。権大納言従一位元長の『元長卿記』によると、明応十年正月（一五〇一）十七日の条に、

今日故禅関御忌日也、盧山寺竹中来、讀<sup>（門力）</sup>誦盆網經<sup>（梵）</sup>、時之後遣<sup>（意）</sup>扇、（下略）

（甘露寺義長、明応九年八月十七日歿）

と見え、文龜元年（一五〇一）二月十三日の条では、

（前略）便路之間、詣<sub>二</sub>廬山寺竹中<sub>一</sub>、去年禁忌之時<sub>（仁父親長壽去）</sub>、其後為<sub>レ</sub>礼可<sub>レ</sub>詣<sub>レ</sub>處、五旬中公儀大變出来、其後無<sub>二</sub>寸

隙<sub>一</sub>所令<sub>レ</sub>無<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>也、殊近日依<sub>レ</sub>有所用<sub>二</sub>兩三度被<sub>レ</sub>尋、他出之間不<sub>二</sub>対面<sub>一</sub>、旁可<sub>レ</sub>謝故也、古仏本尊等令<sub>二</sub>拜見<sub>一</sub>、次有<sub>二</sub>一盞<sub>一</sub>歸了。

とあり、親長薨去のときの籠僧であつた廬山寺竹中坊が毎月忌ことの齋参りに出向いているのである。

亡母に關しては、葬礼の次第を『元長卿記』から考察することにした。文龜二年（一五〇二）四月一日、逝去の条では、

曉天既御臨終歟之由令<sub>二</sub>見給<sub>一</sub>間、奉<sub>レ</sub>勸<sub>二</sub>念仏<sub>一</sub>、暫而御氣色聊令<sub>レ</sub>直給、于<sub>レ</sub>時天欲曙、戊剋計近<sub>二</sub>御枕<sub>一</sub>處、御氣色

楚例了、則奉<sub>レ</sub>勸<sub>二</sub>念仏<sub>一</sub>、江南院、東向、庵室以下在<sub>二</sub>此席<sub>一</sub>、知<sub>二</sub>死期之終<sub>一</sub>、既如<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>禪定<sub>一</sub>御息終了、押<sub>二</sub>悲淚<sub>一</sub>暫在<sub>二</sub>

御枕<sub>一</sub>、移剋間各分散、御北首事申<sub>二</sub>含江南院<sub>一</sub>了、宗寿<sub>（親繼男）</sub>終夜在<sub>レ</sub>傍、御枕方立<sub>レ</sub>机、灯明、燒香供<sub>レ</sub>之、

と詳しく記し、二日の条では、

早朝使出<sub>レ</sub>遣<sub>二</sub>陰陽頭有憲朝臣許<sub>一</sub>、御入棺已下御葬礼、七々中陰之日次尋<sub>レ</sub>之、着服日次、御葬礼日、無<sub>二</sub>相違<sub>一</sub>之様

可<sub>二</sub>相計<sub>一</sub>之由申付了、戊剋許先奉<sub>レ</sub>出<sub>二</sub>變泉寺<sub>一</sub>、靈山末寺梵阿庵也、多年歸依之故也、於<sub>二</sub>此所<sub>一</sub>則沐浴、入棺等事、

今夜可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>由申付了、江南院、宗寿等令<sub>レ</sub>奉<sub>二</sub>付給<sub>一</sub>、御葬礼来六日由見<sub>二</sub>日次<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>三千本<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>此事<sub>一</sub>間、以<sub>二</sub>

梵阿示<sub>二</sub>合彼所<sub>一</sub>諗、御出時御輿差寄時分、予下<sub>レ</sub>殿、令<sub>レ</sub>出給間蹲<sub>レ</sub>居、如<sub>レ</sub>夢々々。

とあり、三日の条では、

僧衆事、從<sub>二</sub>兼日<sub>一</sub>廬山寺衆申合了、仍遣<sub>レ</sub>人申調畢。

と記載され、四日の条では、

用意之外無<sub>二</sub>他事<sub>一</sub>。

と見えて、五日の条では、

依<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>晝天<sub>一</sub>、自<sub>二</sub>今夜<sub>一</sub>向<sub>二</sub>宝泉寺<sub>一</sub>二宿了、江南院、東向、北向、庵室殿、攝取院等也。  
（元長妻、高倉水緒女）（元長妹、真慈）

と記載されていて、陰陽頭安倍有憲に葬儀の日次を尋ねて、指示をあおぎ、且那寺盧山寺とも充分な打合せをして準備をととのえ、万全の配慮のうちに明日の葬儀にそなえたのである。

葬礼当日の六日の条では、

寅剋盧山寺之衆十一人被<sub>二</sub>来入<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>諷經<sub>一</sub>、先<sub>レ</sub>是着<sub>二</sub>素服<sub>一</sub>、僧衆於<sub>二</sub>三昧所<sub>一</sub>参会<sub>云々</sub>、仍先被<sub>二</sub>帰<sub>一</sub>、次差<sub>二</sub>寄御輿<sub>一</sub>、先

之予地上着<sub>二</sub>藥沓<sub>一</sub>、先御輿前火役人

親經  
元国

在<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>、次東向輿、次北向輿、次攝取院并庵室殿步行在<sub>二</sub>此後<sub>一</sub>、次予、

江南院奉<sub>二</sub>相從<sub>一</sub>、宝泉寺大宮辺也、彼三昧近辺、

（所説方）

依<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>便<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>此、到<sub>二</sub>無常堂<sub>一</sub>立<sub>二</sub>御輿<sub>一</sub>、備<sub>二</sub>供具鳩美榮<sub>一</sub>、供<sub>二</sub>蠟燭

六丁<sub>一</sub>、僧衆十二人一列有<sub>二</sub>諷經<sub>一</sub>、想<sub>二</sub>蓮庵<sub>一</sub>引導、（筆者濁点）、事終間拳<sub>二</sub>御輿<sub>一</sub>間、予進参懸<sub>レ</sub>手退了、至<sub>二</sub>爐上<sub>一</sub>、路

次供<sub>二</sub>蠟燭<sub>一</sub>、僧衆引<sub>レ</sub>列唱<sub>二</sub>陀羅尼<sub>一</sub>、奉<sub>二</sub>置爐上<sub>一</sub>間予蹲居、江南院同<sub>レ</sub>之、下火之間暫而帰<sub>二</sub>宝泉寺<sub>一</sub>了、先々立前机

前焼香、伊長着<sub>二</sub>古服<sub>一</sub>焼香直垂、於<sub>二</sub>寺夜猶殘間<sub>一</sub>一睡了、天明帰<sub>二</sub>蓬屋<sub>一</sub>、御拾<sub>二</sub>骨未剋<sub>一</sub>、参<sub>二</sub>葬場<sub>一</sub>奉<sub>レ</sub>拾<sub>レ</sub>之、奉<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>

輿中<sub>二</sub>帰了<sub>一</sub>、自<sub>二</sub>今晚<sub>一</sub>忌中可<sub>二</sub>始行<sub>一</sub>也、仍堂莊殿内々用意、未剋計自<sub>二</sub>盧山寺<sub>一</sub>僧一兩人来儲<sub>レ</sub>之、供具等予手自沙

汰了、酉下剋忌籠之僧三人入来、暫而始<sub>二</sub>法事<sub>一</sub>、入夜陀羅尼如<sub>レ</sub>常。

と見えている。煩をいとわず葬礼の記事の全容を掲げたが、十六世紀初頭の公家衆の葬礼がどのようにして行なわれたか、その大略を知ることができるのである。つづいて、初七日から満中陰に至る中陰中の法要についての記事をあけると、次のごとくである。

七日、今日修<sub>二</sub>初七日法事<sub>一</sub>、廿五三昧也、修時僧<sub>臨歎</sub>兩人相加、僧衆定斎也、予・江南院同之。

十三日、修<sub>二</sub>二七日法事<sub>一</sub>、臨時僧兩人、以上五人、有<sub>二</sub>舍利講<sub>一</sub>、写<sub>二</sub>經<sub>一</sub>・念誦等無<sub>二</sub>寸隙<sub>一</sub>之間、日々無<sub>二</sub>殊事<sub>一</sub>間、不<sub>レ</sub>記<sub>レ</sub>之、今日之經營江南院沙汰也、御書写<sub>二</sub>四十八願<sub>一</sub>了。

十八日、修<sub>二</sub>三七日法事<sub>一</sub>、僧衆如<sub>レ</sub>例、羅漢供也、北向・攝取院等修<sub>二</sub>此事<sub>一</sub>。

廿二日、四七日分也、有<sub>二</sub>隨行念仏<sub>一</sub>、予令<sub>二</sub>共行<sub>一</sub>。

廿四日、今日五七日、有<sub>二</sub>法花饑法<sub>一</sub>、庵室殿一向沙汰也、僧衆如<sub>レ</sub>例五人、令<sub>レ</sub>書<sub>二</sub>寫血盆經并法花廿八品<sub>一</sub>了、御拾骨奉<sub>二</sub>納淨蓮院<sub>一</sub>、御石塔數年已前御道修也、予執<sub>レ</sub>鋤奉<sub>二</sub>入土<sub>一</sub>、分散奉<sub>二</sub>納誓願寺<sub>一</sub>了。

五月一日、今日六七日法事奉<sub>レ</sub>修<sub>レ</sub>之、有<sub>二</sub>往生講式<sub>一</sub>、竹中読<sub>レ</sub>之。

六日、明日可<sub>レ</sub>修<sub>二</sub>尽七日<sub>一</sub>也、仍宿忌、有<sub>二</sub>隨行念仏<sub>一</sub>、予・江南院共行。

七日、尽七日也、有<sub>二</sub>例時<sub>一</sub>、臨時僧四人、已上七人、自<sub>二</sub>午刻計<sub>一</sub>雨下、修中無為祝着々々、令<sub>レ</sub>書<sub>二</sub>寫提婆品<sub>一</sub>、詠一首<sub>二</sub>書<sub>一</sub>付表紙<sub>二</sub>懷了<sub>一</sub>、

たのみこしは、そのかけの枯しより

根にかへる苔の下をしそ思ふ

諸家之訪、或自身、或使者、不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>記、道場寫經、法華經一部・三部經二部并梵納經、今日事終後、脱<sub>二</sub>素服<sub>一</sub>、陰陽頭麻糸之帶祓等送<sub>レ</sub>之、脱<sub>二</sub>服遣了<sub>一</sub>、寫經等事多間、每事不<sub>レ</sub>記、且又無<sub>二</sub>殊事<sub>一</sub>。

この間、四月廿四日、五七日の法要のとき、納骨が行なわれるのであるが、さきにも見たように慣例によって母方の墳墓の所在地、淨蓮花院の墓所へ葬られたのであるが、父方の墳墓誓願寺の墓所へも分骨して葬むられたのであった。しかし、永正三年（一五〇六）四月の元長亡母（後広大寺殿）正忌日の条では、想蓮庵・竹中坊・金光院らを齋に招請したことが見え、二月一日などの月忌命日でも盧山寺系の僧侶が齋を勤めているので、元長の時代には、盧山寺との師檀關係が固まったと思われるのである。

『元長卿記』によると、亡父母の年忌、月忌を営んだことが確実に見えて、毎月十七日の条では亡父親長と盧山寺との師檀關係が見え、亡母後広大寺殿の月忌に關しては、始め葬礼のとき導師を務めた想蓮庵が齋に入室していたが途中から盧山寺長老が出向くようになって、甘露寺家との師檀關係が固定化することになるのである。盧山寺は現在

単立寺院ではあるが、もと天台宗に属し、室町末期～近世初頭頃は四宗兼学で浄土宗西山派としての色彩が濃厚であった。元長自身も浄土宗の信者らしく『元長卿記』永正八年（一五二一）正月十一日の条に見えるように、「来廿五日故法然上人三百年忌也、仍於西岡光明寺ニ如法念仏、從来十九日執行々」と浄土宗の宗祖法然上人の御忌会について多大の関心を払っていたのである。

#### 四

関西大学の田中久夫氏は、「文献にあらわれた墓地——平安時代の京都を中心として——」（森浩一編『墓地』東京社会思想社刊所収）の第七章「浄妙寺の建立と木幡山」の中で、

木幡山では、埋葬後、墓詣をしている姿をうかがうことができない現実があつたのである。（中略）『栄華物語』の中に、木幡山が埋葬地であることを記述したのち、ただ標ばかりの石の卒都婆一本ばかり立てれば、又参り寄る人なしと墓に参詣する者のない風景を描いている。（濁点筆者）

と述べているので、平安中期頃までは、貴族の間では、墓参りの風習が確立していなかったことが知られるのであるが、藤原道長が木幡山の墓地を整備し、木幡山を管理する寺院として浄妙寺を建立したことを契機として、木幡山は藤原氏一族の墳墓の地として定められ、祖先を祭祀する風習も確立したのである。このことは、氏寺の歴史の変遷過程にあって、浄土教的寺院が氏寺ともくされた時期と期を一にしている。これがやがて本論で述べたような経過をたどって、浄土宗系寺院との師檀関係が固定し、各家ごとの祖先崇拜の形態が確立してくるのである。

今一つ、中世末期に浄土宗系寺院と公家衆とが師檀関係をもつ契機として、浄土宗系著名寺院の住僧の資質向上を計る運動との関係もまた重要である。清浄華院の等潤上人が香衣着用を許されるに至った事情について、万里小路時房は『建内記』永享元年（一四一九）六月九日の条に、



淨花院長老<sup>上人</sup>等、香衣着用事、為門徒之懇款、予依當時之由緒、執申入之處、今朝三寶院准后披露、蒙□<sup>(満)</sup>裁

許、云「當時云後代、一室之眉目此事也、時房執申之条無相違二条、面目此事也、今夕向門跡之時准后承

之、直罷向寺院示住持、触門徒了、早令着用可參、室町殿之由指南了、此事廬山寺者西山之一流也、(筆

者濁点)

鹿苑院殿御代勤渡唐御使之時被聽香衣、于今住持之人着用也、淨花院鎮西一流正統也、而依無扶

持之輩衣鉢似有勝劣、為上人上足之弟子聖光上人之稟承異于他之處、不便之上、戒法又黒谷一流正統也、元

歷、法勝已看之、是又參師之故歟、等瀬上人、称光院御知識也、其寄尤重者哉、誰謂非拙哉、彼是有存旨一

執申了、無為自愛々々、住持令迷惑、衆僧令歎喜者也。雖非可依裳衣、添世俗之信仰、為勸若輩之稽

古也、可云興隆之因縁者哉。前住定玄上人予叔父也、蒙每事之扶助、養育無比類、聊似報彼恩者哉。

このようにして、万里小路時房の周旋によつて、清淨華院第十世等瀬上人に香衣着用の許しがくだり、名実共に公

家の旦那寺としての体裁をととのえたのである。この間、正長元年(一四二八)六月三日から六月二十四日にかけて等

瀬に香衣着用の許可がおりるようにな準備をととのえたのであった。さきの永享元年(一四二九)六月九日の条にも

見えるように、浄土宗西山流の廬山寺に香衣着用のことではさきをこされていたので、等瀬に香衣着用の許可がおり

たときは、当人にも増して師檀關係にあつた時房の喜びはまた格別のものがあつたようである。

このようにして、中世末期には著名な浄土宗系寺院は名実共に公家衆の旦那寺として菩提寺として、師檀關係を結

ぶにふさわしい体裁をととのえていった。そこへ月忌ごとにみられる祖先供養としての齋参りの定着である。当時の

世相とあいまって当時の斜陽貴族が浄土教信仰へと傾斜した事情はおのずから明らかとなつてくるのである。当時新

興の有力町衆がこぞって法華信仰に傾斜した時代にあつて、現世に危機感を強くいだいた公家衆が「願生浄土」を熱

心に求めた事情は、時代背景を考察しながら対比して考えるときわめて興味深い事象を我々に提起してみせてくれる

のである。

註

① 氏御八講については、康和五年八月一日戊申（高麗院修理ノコトニカ、依ニ此沙汰、今日不レ參勸修寺、山羽盛実以下四人参会云々

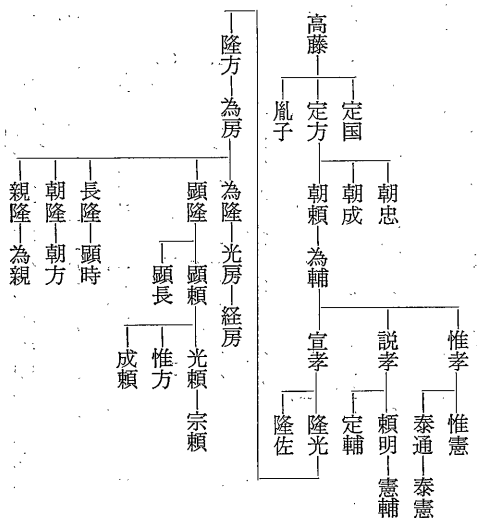
『為房卿記』（大日本史料第三編之七所収）等。

② 『類聚三代格』卷二所収。延喜五年九月二十一日付太政官符。

③ 『勸修寺文書』卷二十一の四「勸修寺古事」（東京大学史料編纂所本）にもほぼ同様の記事が見える。

④ 『大府記（為房卿記）』永保元年七月十七日条の裏書。

⑤ 『永昌記（為隆卿記）』大治四年七月二十七日条。



⑥ 『大府記』永保元年七月十七日条裏書。

⑦ 略系図をしめせば、上図のごとくである。

⑧ 頭隆卿、為隆卿、兩人嫡庶事、為隆者為舍旦元、頭隆者舍弟也、然而父為房卿、以頭隆為家嫡之間、父卿永久三年四月死、重服内、同年八月十三日補藏人頭畢、

為隆卿、保安三年正月補貫首、雖舍旦元後進也、不依三年齒嫡庶、所見古今所不知也。

とある。

⑨ 文明二年十二月廿六日の条に、

亥剋許中御門中納言胤宣、実連朝臣等来、示告云、法皇只今損御心地、被召御医師云々予倒衣馳参、已御大事之体也、暫清宮内卿明茂卿等参入、各御中風之由申也、又暫照珪法印参入、同申御中風之由、可進御業之由被仰之、御正念已失了（中略）先御善知識雖被相尋、泉涌寺々衆一人モ不<sub>レ</sub>在京、実無<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>然之仁、知恩寺参入念仏。

とある。

⑩ 翌二十七日の条に、

知恩寺猶祇候、法事御葬礼事可<sub>レ</sub>為如何哉之由、人々有<sub>レ</sub>沙汰、無<sub>レ</sub>泉涌寺々僧云、就勸願寺可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰三元応寺、坂本辺住持移住云々。（下略）

と見えている。

⑪ 『実隆公記』永正六年正月廿八日辛酉の条に、

抑老官女号局右京大夫、法名光智、十老病無<sub>レ</sub>頼也、仍相語近

所<sup>二</sup>度観、小庵可<sup>レ</sup>移置<sup>二</sup>之由支度之処、雲龍院来臨之間、以<sup>二</sup>彼與<sup>一</sup>送<sup>レ</sup>遣<sup>レ</sup>之、尤多幸也。

とある。また、永正二年十一月六日丁亥の条にも、

寒風甚、及晩下女梅枝、俄中風、頗及<sup>二</sup>死門<sup>一</sup>、仍入夜出<sup>二</sup>今出川辺<sup>一</sup>、不便不便。

七日戊子の条に、

抑彼下女終<sup>レ</sup>以<sup>二</sup>逝水<sup>一</sup>、卅余年召仕、正直者也、不便失<sup>レ</sup>力了、

と見えている。

⑫ 依亡父正忌、昼間許不<sup>レ</sup>参、古者一昼夜不<sup>レ</sup>参、当代昼許不<sup>レ</sup>参、一日不<sup>レ</sup>参内、當時醫願寺等参、或暫願寺墓所等参詣、重服所等詣、同詣之人不<sup>レ</sup>及<sup>二</sup>沙汰<sup>一</sup>参内如何

⑬ 参詣浄蓮花院墓所、今度乱中石塔散乱之処、大略取<sup>レ</sup>居<sup>レ</sup>之、仍一向非<sup>二</sup>其物<sup>一</sup>、他物等居<sup>レ</sup>置了、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>説事也、亡母外祖母墓等如<sup>レ</sup>元切<sup>二</sup>付之<sup>一</sup>、召不<sup>二</sup>散乱<sup>一</sup>之故也、於<sup>二</sup>其外<sup>一</sup>者一向沙汰事也、後人不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>存知<sup>二</sup>事也<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>説也。

⑭ 田中久夫「文献にあらわれた墓地——平安時代の京都を中心として——」（森浩一編『墓地』東京社会思想社所収）九五〜九八頁参照。

⑮ 『建内記』正長元年六月三日の条では

花開院、福聚院等来臨、（等應）浄花院長老香衣□有<sup>二</sup>談合<sup>一</sup>之

旨者也。

六月十六日の条では、

浄華院長老香衣著用御免事、談<sup>二</sup>合准后<sup>一</sup>、尤可<sup>レ</sup>然之旨被<sup>レ</sup>示<sup>レ</sup>之。

翌十七日の条で、

今日向<sup>二</sup>浄花院<sup>一</sup>言談<sup>（香衣）</sup>

二十三日の条では、

向<sup>二</sup>浄花院<sup>一</sup>、聴<sup>二</sup>聞如法念仏<sup>一</sup>日中時了、今日謁長老彼宗正流間事談<sup>レ</sup>之、子細追可<sup>レ</sup>記<sup>レ</sup>之。

とある。

翌廿四日の条では、

向<sup>二</sup>浄花院<sup>一</sup>、終日閑談、彼宗相承次第被<sup>レ</sup>談<sup>レ</sup>之、予依吳于他、代々手印鎌倉然阿<sup>（鎌倉）</sup>上人与礼阿<sup>（法光明院、然翌上人并開山向阿上人）</sup>上人与第二<sup>（定）</sup>玄心和尚被<sup>レ</sup>聴<sup>二</sup>拜見<sup>一</sup>、宿因之至、感懷無極者也、前住玄公上人辞世頌拜<sup>二</sup>見之<sup>一</sup>、真筆如<sup>レ</sup>新、添<sup>二</sup>恋慕<sup>一</sup>之思者也（中略）黒谷戒法唯受<sup>二</sup>一人正流<sup>一</sup>事、玄公上人御遺書、被<sup>レ</sup>与当住同等衆上人同拜<sup>二</sup>見之<sup>一</sup>。当住香衣著用事、予可<sup>レ</sup>申<sup>二</sup>沙汰<sup>一</sup>之由存<sup>レ</sup>之、仍如<sup>レ</sup>此事等聊出<sup>二</sup>不審<sup>一</sup>之故也、他流誠難<sup>二</sup>比肩事<sup>一</sup>也、弥重<sup>レ</sup>。

と見えている。

